

「みこころが地にも」

詩 篇 第103篇1節～13節
マタイによる福音書 第6章 10節b

説 教 岡村 恒 牧師

「みこころが天で行われるとおりに、地にも行われますように。」(10節b)主イエスは弟子たちに、このように祈れとお教えになりました。神の子である私たちも、いつでもこのように祈り歩んで良い、と主イエスは言われます。〈みこころ〉とは〈神の意志〉です。この祈りは、〈実現せよ、神の意志〉という激しい響きを持っています。

私たちはしばしば、この祈りを誤解して祈ります。自分の願いが神の計画と重なって、神の良い計画だけが自分の人生に実現をしていくように、とこの祈りを祈ってしまいます。そして、思いがけない出来事や厳しい試練に直面をし、神への信頼を失いそうになるとき、私を愛するというあなたのみこころがなぜ私の人生に成就しないのか、と神を非難し始めます。

「みこころが行われますように。」この言葉と同じ言葉で、主イエス・キリストが祈られました。十字架の出来事のすぐ前の夜、〈ゲッセマネの夜〉と言われる祈りの場面です。「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください。」(ルカによる福音書 第22章42節)

主イエスは、父なる神と一度も切り離されたことのないお方です。しかし、その主イエスでさえも、主イエスだからこそ、予定通りの道を平然と歩んだのではなく、死ぬばかりの悲しみを味わいながら、この杯を私から取りのけてください、と祈られました。神のみこころが実現していくことの恵み深さを誰よりも知りながら、ご自分が味わわなければならない絶望、全ての人が味わう痛みを前もってご覧になり、苦しみもだえ、この祈りを祈ってくださいました。命がけで、徹底的に祈り抜いてくださいました。そしてその祈りの通り、神の計画通りに十字架にはりつけにされ、死なれました。

この祈りの意味を知るとき、私たちはむやみにこの祈りを口にできなくなります。神の意志が実現するよりは、自分の願いを貫徹し、自分の意志を押し通したいのが私たちの姿です。自分の願いではなくて、神の計画が人生に実現をしていく。それは、私たちに恐れと不安を与えます。私たちには、神のみこころの全体像が分

からないからです。主が私たちの口に入れて下さらなければ、私たちはこの祈りを祈ることなどできませんでした。

神のみこころが成るといことは、私たちに望ましいことが起こるとい話ではありません。しばしば思いもしないことが起こり、深い悲しみを味わうことがあります。しかしそれでも、その出来事の背後で、自分の人生を支えるお方が最も良い計画を用意し、実行しておられる。これを信じるのが、代々の教会が受け継いできた〈神の摂理〉を信じる信仰です。その信仰は、主イエスの祈りによって支えられています。主イエスが祈って下さり、神がこの祈りを聞いてくださったので、私たちは今ここで礼拝を守り、聖書の言葉に聞き入っています。この祈りは、既に聞かれた祈りです。最も大切な神の意志が、もう既に、この地上に実現されました。

最も大切な神の意志。それは、主イエスの死によって、主イエスを信じる者が罪を赦され、神の子となり、主イエスと共に食卓につくようになることです。主イエスはその日の姿を、まるで目の前に見るかのように歩まれました。あの日、弟子たちに祈りをお教えになったときも、ゲッセマネで祈られたときも、十字架の上で血を流しておられたときも。

〈摂理〉とは〈あらかじめ見る〉という意味の言葉です。〈神の摂理〉は、神があらかじめご覧になり、用意をし、それを喜んでおられるということを行い表しています。私たちの人生全体は〈神の摂理〉の中にあります。私たちの人生に実現をし、完成をしていく神のみこころは、私たちにとって喜ばしい計画です。

キリスト教信仰は、自分の内面の救いに立ち止まりません。神がお創りになったこの世界全体を、神の計画が実現していく場所として捉えます。代々のキリスト者は、地上の責任を放棄することなく、労して生きてきました。私たちは、自分自身だけではなくて、被造物全体が贖われ、新しい天と地が到来する日が早く来るように日々祈り、労しながら、神の計画に一切を委ねて歩むことができるのです。安心をして、希望を与えられながら、この祈りを祈っていきましょう。

(記 説教要約奉仕者)